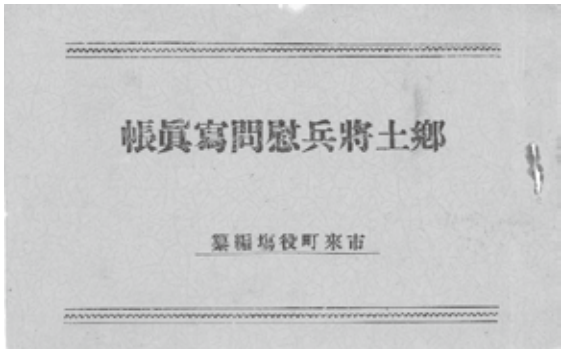
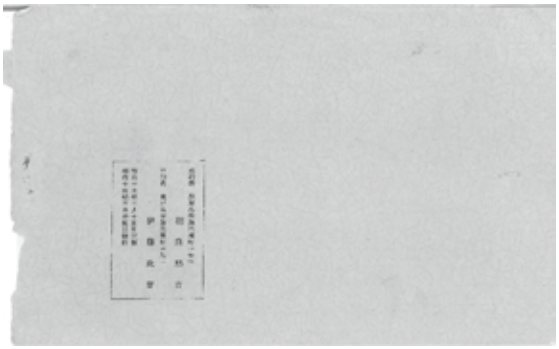
(5)　『郷土将兵慰問寫眞帳』より抜粋

本市所蔵資料として、『郷土将兵慰問写真帳』が残されています。これは、昭和 15（1940）年 3 月に旧市来町役場が、皇紀 2600 年の紀元節祝賀行事のひとつとして作成したもので、旧市来町出身の将兵に対し、戦地へ慰問品として贈られたものと思われます。表紙等を除き 26 ページの写真集で、出征兵士の壮行風景や地区ごとの戦役の遺家族の写真を始め、市来町の全景・名所旧跡、その他子供たちのようすや官公署職員、町議会議員などの写真が載せられています。

以下に、一部を抜粋します。



郷土将兵慰問写真帳（表紙）



（裏表紙）

【勝目　健　市来町長の挨拶文】

『本日は輝ける皇紀二千六百年の紀元節であります。今暁（こんぎょう）、橿原（かしはら）の素木（そぼく）の香（か）も新らしき神殿から、大太鼓が鼕々（こうこう）と全國に響けとばかり鳴り渡ったのであります。皇祖発祥の地たる我が鹿児島縣に於て行はれる各種の記念事業の一として靈峯高千穂山麓に古式さながらに完成されたる古宮趾神域に於ていとも森厳なる天孫降臨祭が本日黎明に擧行されました。

本町に於ては町民一同早起し各村社に参詣し盛大なる祭典を行ひ、明淨の心に肇國の大精神を靈感し、併せて皇軍の武運長久を祈念し感謝の至誠を捧げたのであります。終りて一同行進して各小學校に於ける紀元節、建國祭の式典に参列し、式後町報德會の発會式も厳粛に行ひ感激の高調に達し弥（いや）か上にも日本精神の作興（さっこう）を期し堅忍持久、勇往邁進、銃後の守りを倍々堅（ますますかた）からしめる次第であります。此の尊き意義深き佳日（かじつ）をトし、皇軍慰問寫真帖を作製し本町出身将兵各位に贈呈し、町民一同微衷（びちゅう）を披瀝し諸士征戦の旅情を慰めむと欲するものであります。御笑納を願ひます。

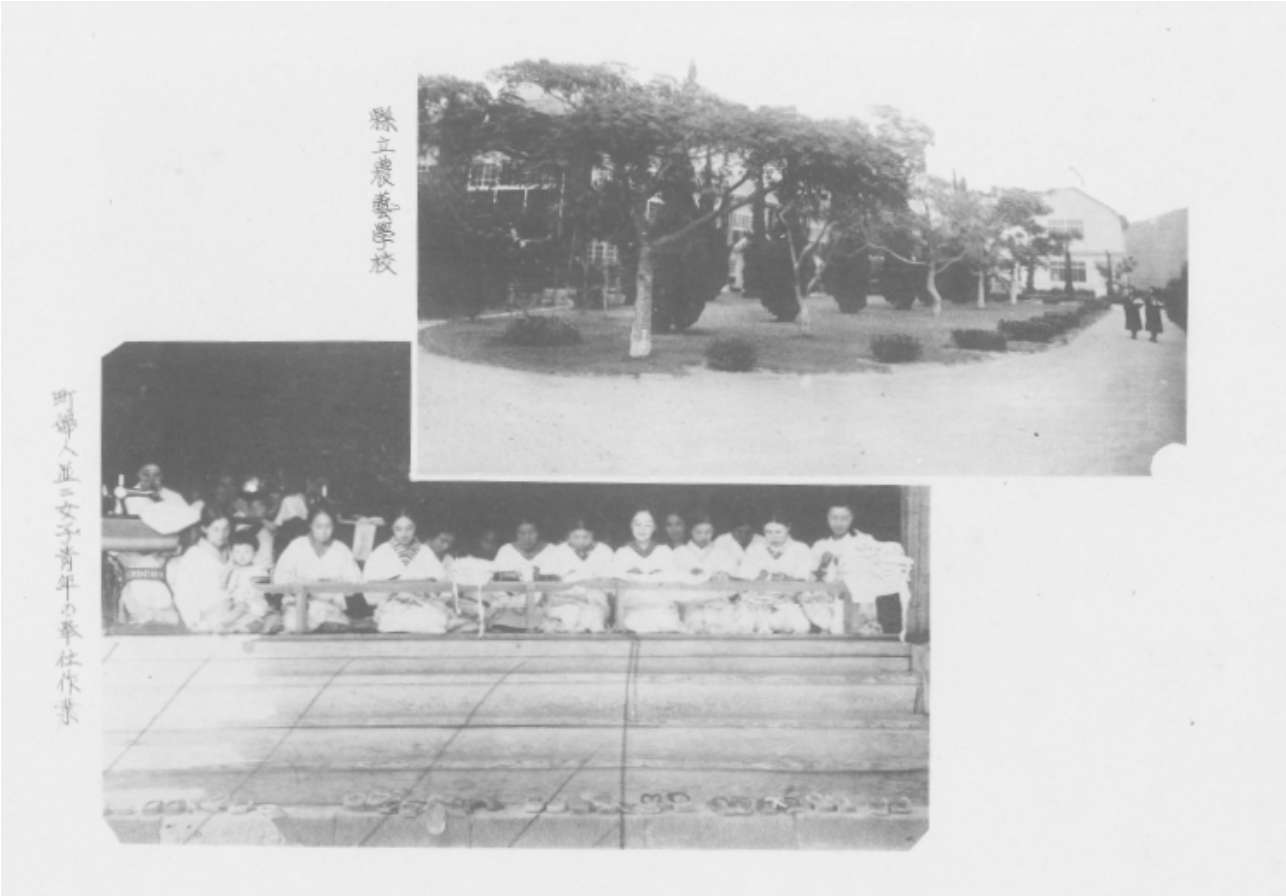
昭和十五年二月十一日　　市来町長　　勝　目　　健　　』

写真①　市来駅頭入営兵見送ノ景

写真②　町営　高崎記念園

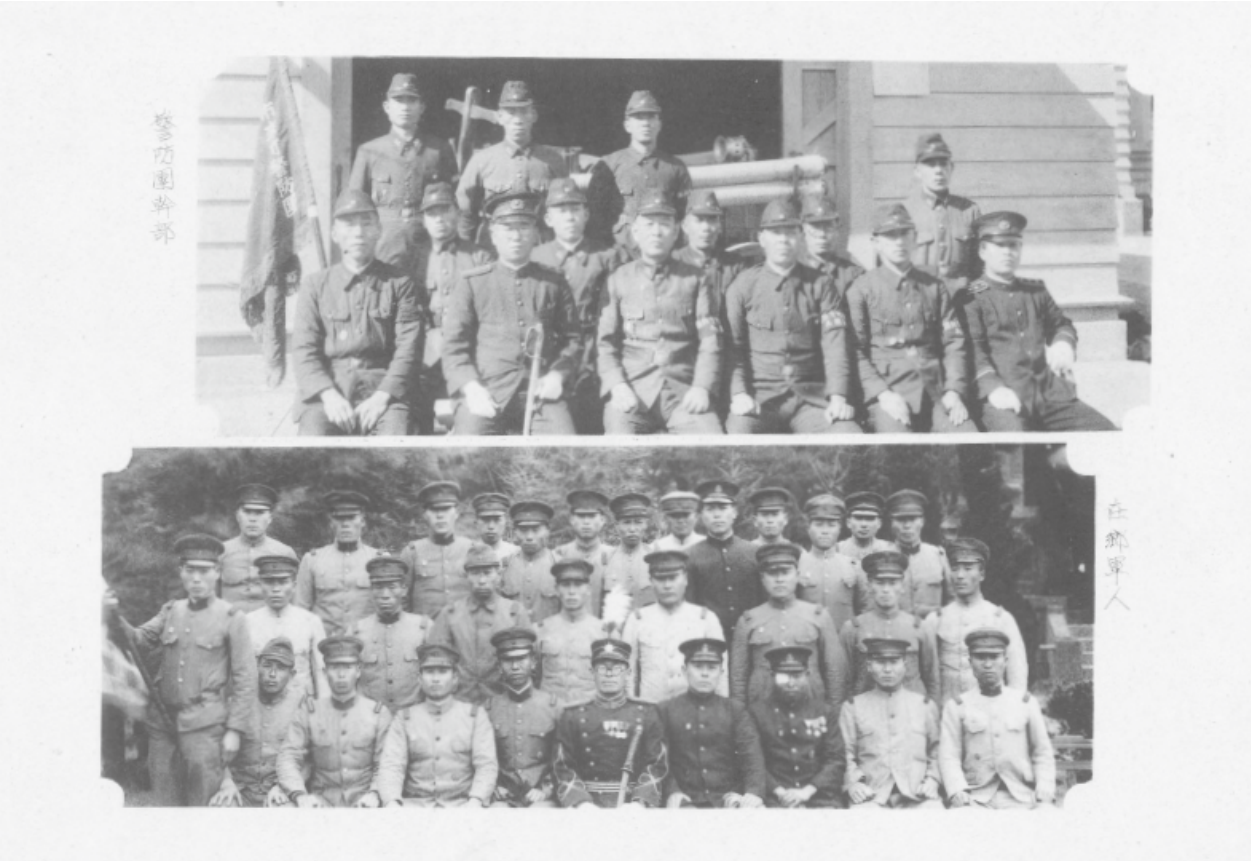
写真③　町営　湊町公会堂

写真④　市来町全景

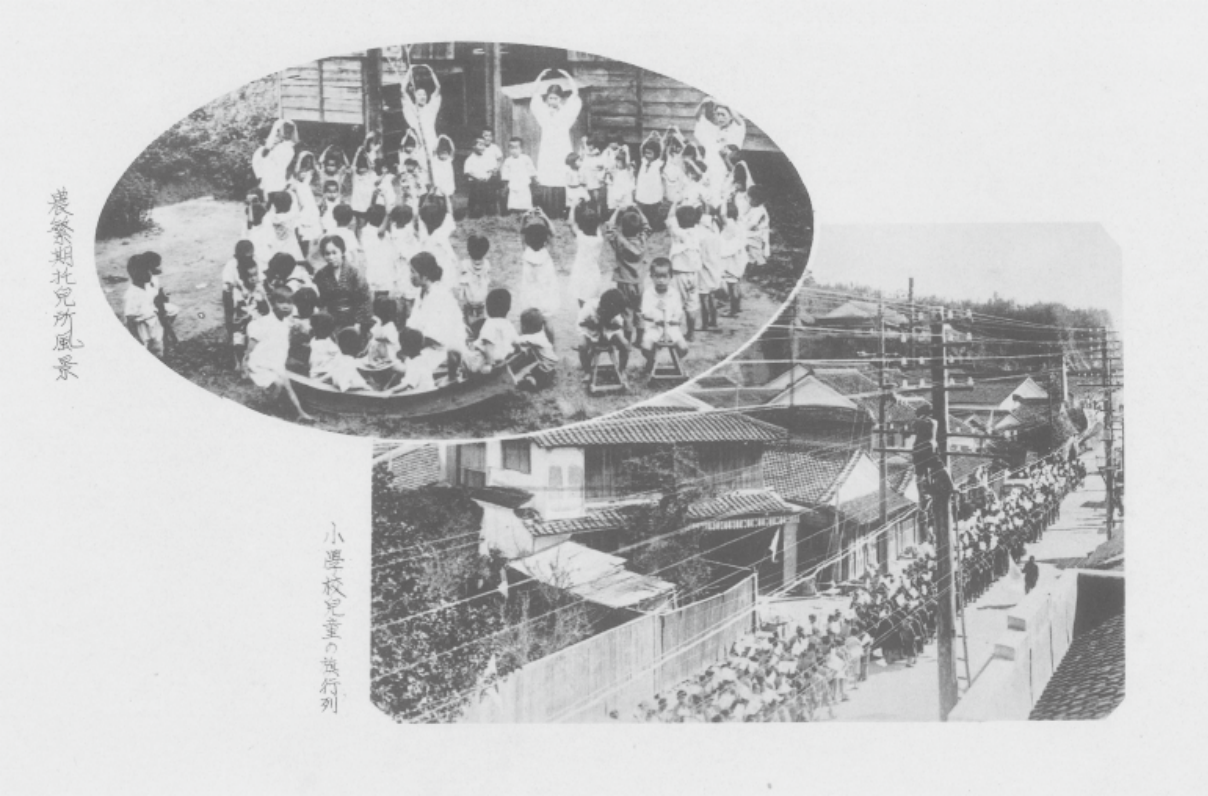


写真⑤(右上)　県立農芸学校

写真⑥(左下)　町婦人並に女子青年の奉仕作業



写真⑦(上段)　警防団幹部
写真⑧(下段)　在郷軍人



写真⑨(左上)　農繁期託児所風景
写真⑩(右下)　小学校児童の旗行列

【写真の解説】

写真①「市来駅頭入営兵見送ノ景」

駅舎前に整列している出征兵士が訓示を受けています。その両側は入営祝いの幟(のぼり)を持った家族や見送りの人々で溢れています。

この様子は、『創立百周年記念誌　かわかみ』の中で紹介されているので、以下抜粋します。

> **出征兵士の見送りと遺骨迎えに市来駅まで**
>
> 大東亜戦争もだんだん激しくなった昭和 18(1943)年の 4 月、市来駅前の広場に待っていた馬車に乗り、これから赴任する川上(小学校)に向かいました。(中略)
>
> もうこの頃は、日本中の全てが戦争を離れては考えられませんでした。教育は勿論、衣食住の全てが国家統制下にありました。教室から流れる歌もすっかり 2 拍子の勇ましい行進曲風のものが多かったです。「愛国行進曲」「太平洋行進曲」「月月火水木金金」と歌詞の意味はよく分からないままほっぺを真っ赤にして元気よく歌っていました。この子等の父が幾人も大東亜戦争で戦死されました。昭和 18 年より 20 年にかけ、中学年を担任していた私は、よく市来駅までの二里(約 8km)近くの道を出征兵士の見送り、又遺骨迎えに子らと行きました。あの頃、9、10 歳位のこどもが裸足(はだし)でよく頑張りました。(中略)
>
> 学級会で戦地のおとうさんに慰問袋を送ろうと話し合い、図画、習字、作文、折り紙など、かわいい慰問袋を送りました。戦地からの手紙はいつまでも大切に教室の壁に飾り、お無事をみんなで祈りました。
>
> **引用文献　増元八千代 1980「出征兵士の見送りと遺骨迎えに市来駅まで」『創立百周年記念誌　かわかみ』**

写真②「町営　髙崎記念園」

髙崎親章は、茨木県知事をはじめ京都・大阪府知事を歴任、その後貴族院議員となり、従二位勲一等を贈られました。町ではその功績を称えて、誕生地に高崎記念園を創設しました。記念碑はこの地にありましたが、都市計画により別の場所に移されています。

写真③「町営　湊町公会堂」

公会堂は、この写真帳が作られた当時はありましたが、空襲により焼失しました。

写真④「市来町全景」

左手に西村寺、右手に梅巌寺の墓が見えます。写真中央には役場庁舎が確認できます。右上の松林は稲荷崎で、当時の海岸線は役場付近まであったことがうかがえます。

写真⑤「県立農芸学校」

県立農芸学校は、第二師範学校の跡地に昭和 9 年に建てられました。

写真⑥「町婦人並に女子青年の奉仕作業」

長い裁縫台上で縫物(幟旗か)をしている姿が写っています。左側には当時のミシンが見られます。

写真⑦「警防団幹部」

警防団は昭和 14(1939)年に消防組と防護団が統合された組織で、空襲の際の消火活動などに従事していました。

写真⑧「在郷軍人」

在郷軍人は除隊した兵隊で、現在の予備自衛官として組織されていました。

写真⑨「農繁期託児所風景」

田植の時期など、農家が忙しい時期に子どもを集めて臨時の託児所を設けていました。当時、子どもたちがたくさんいた様子がうかがい知れます。

写真⑩「小学校児童の旗行列」

市来役場近くの旧街道沿いを旗行列で歩く様子です。当時の町の様子がうかがい知れます。

(6) 『串木野市春日町沿革史』

昭和 61(1986)年 11 月春日町公民館の有志により編纂された『串木野市春日町沿革史　潮入潟』より「第 2 章 春日町の終戦直前直後の様相」の抜粋となります。

〔註〕原文については、一部要約し、改変を行っています。

第 2 章　春日町の終戦直前直後の様相

昭和 14 年 4 月 1 日、串木野村から串木野町となったが、日本ではその前後から戦争が始められていた。

昭和 6 年 9 月 18 日	満州事変
昭和 7 年 11 月 28 日	上海事変
昭和 11 年 2 月 26 日	二・二六事件
昭和 12 年 7 月 7 日	日支事変
昭和 16 年 12 月 8 日	太平洋戦争

といった具合に戦争は、次から次へと拡大されていった。国民は、戦争遂行のため「撃ちてし止まん」の精神が植えつけられ、戦争勝利のために突っ走っていった。

そして出征兵士の見送りや遺骨の出迎えもしていた。

終戦直前直後(昭和 19 年～20 年)の春日町集落の模様を、故Ｉ氏の日記から、その当時を偲んでみたい。

Ｉ氏は従軍先で病気になり、同氏の住宅で病気療養中、昭和 20 年 10 月 16 日に他界された。

昭和19年6月18日

戦地の弟から妹のH宛の航空往復葉書が来た。其の一節に

「君から送られてきた菫(すみれ)の押花を持ちながら、転戦幾度か肌身にはなさずにやって来た。時々引き出して故郷を偲(しの)び親兄弟が思い出される。内地の新しいかおりがにおって来るようだ。」

と書いてあった。肉親の情愛というものを、尊くありがたく思った。戦線幾千里の南洋の地より思いを馳(は)せる。戦乱激しき中に、かくも美しくやさしい愛情の湧く弟の心根が可愛くまでに好もしい。

故郷(ふるさと)の菫とどけり秋の朝

昭和19年6月19日

児童も学生も社会人も皆、食糧増産及び兵器増産に昼夜席の温まる暇なき有様である。当町も時局の波に乗って斉連ヶ丘の開墾に着手し初めたものである。

昭和19年6月25日

日本は文字通り決戦である。敵の強引な上陸作戦もこれ以上はとても許されない作戦らしい。国民学校の生徒(現在の小学生)は開墾に、堆肥(たいひ)積みに、手伝いに暇なき有様だ。遊びざかりの子供が、戦わねばと思う気持ちが漲(みなぎ)って頼母(たのも)しい。然(しか)し、彼らが足をひきずりながら帰って行く様は、痛々しさを越えた壮烈さを感ずる。

昭和19年6月30日

2万の米軍はサイパン島に上陸、続々進行中。

記事は小さくとも我々にとりては、実に許すべからざる事である。

昭和19年7月10日

「サイパン島は玉砕したそうだ」

母が沈んだ声で、未だ起きない私に呼びかけた。「うん」と答えたまま、何とも言えない気持ちだ。庭を眺めている私の胸は、感覚を失った者のように。

昭和19年9月9日

串木野のような町にも兵隊や兵器が分散疎開するようになった。串木野も或る意味に於いて軍事基地になった。敵の空襲が旺盛になればなるほど、町は多分の危険性を持っている。町も全(あら)ゆる方面に於いて戦時的気分が充溢(じゅういつ)してきた。昼夜を問わず毎日のほど訓練は行われる。

昭和20年6月28日

今日、沖縄の最後を告ぐる牛島満中将の声明は、更に県民に一大決意を与えたかの観がある。郷土に醜敵を上陸せしめてなるべきや、県民が鍬を取り竹槍を取り戦うのは、今の現実となって来た。

昭和20年7月3日

梅雨晴の好天気、久しぶりに晴々とした気持ちになることが出来た。

昨夜、珍しくも警報が発せられなかったためか、今朝は何となくすべてがのんびりしている様に感ぜられる。朝の冷たい空気は、又不思議に活力を与える。東雲(しののめ)を未だ破らざる陽光の、深く空の海にたたえているようだ。田園の朝も此(こ)の頃になると、美しい鳥の声があたりに谺(こだま)すると、草木のゆらぎも猶一層生々(いきいき)と見ゆる。溜まった水田には朝のかすかな夢のような艶姿(えんし)をうつしている。雲は徐々に山の頂(いただき)を覆いながらうつらいている。3番鳥の刻(とき)の声もやゝ聞えなくなる頃は、あたりは殆んど夜のとばりが開放(あけはな)される。人の声が耳に聞こえてくると、定期のように爆音が明放(あけはな)された青空に轟く。友軍機か敵機か未だ判明出来ない。段々爆音がはっきり吾等の耳に入る頃になると、直観していたように敵の軽るやかな金属性の音がにくにくしげに聞こえる。暫(しばら)くすると、空襲を告ぐる警報が遅まきながら殷々(いんいん)としてひびく。

昭和20年7月8日

沖縄を基地として、敵機の活動は益々活発の度を加えて来た。

昭和20年7月12日

敵機の来襲が頻繁になると共に、漸(ようや)く疎開の声が高くなって来た。殊(こと)に密集せる濱及町の人達は爆音のために寝られず、来襲の度毎に遠方の壕まで避難する有様である。

老人や子供、病人を持つ家族の疎開は当然なさねばならぬが、他に物資の疎開も緊急を要することながら、出来れば家屋地方分散は、是非必要なことでなかろうか。

人々は全く神経を乱されている。例えば、ボロ自動車のエンヂンの音が爆音に聞えたり、自動自転車の発する音を聞いて機銃射撃かと思ったり、甚だしいのになると、牛のなき声に警報かと驚く人達が殆んど全部だ。神経撹乱に陥った人々の無気力な顔を見ると、果たして戦争出来るだろうかと思う。

昭和20年7月16日

主要食糧配給、7人家族にて米5升2合、小麦粉及澱粉2斗、1人当り米7勺(しゃく)、粉1合3勺、計2合、此れが1日の食糧である。相当な創意工夫が必要である。食糧事情は吾等が想像している以上急迫しているらしい。朝1杯の飯を食うたら、後は団子汁にして食べるか、又は油揚にして食べなくては此の配給では、とても賄う事はできない。

主食配給減配に伴って、食塩の減配(味噌)或は配給不能(醤油)は、吾等にとっては最も痛手と云わなくてはならぬ。

殊に県民吾等は、1日3回味噌汁がなくてはならないように習慣付けられているので、その苦痛は云わずもがなである。

味噌と醤油値上げを実施

最近、原料大豆や食塩、樽等の値上りのため、農商省では右に付き12日付を以(も)って販売価格㊀を次の通り引上げ実施

味噌	数量	旧価	原価	醤油	数量	旧価	原価
米味噌	百匁	一五銭	二〇銭	濃厚醤	一升	八五銭	一円五〇銭
麦味噌	〃	一五銭	二〇銭	普通	〃	八五銭	一円〇〇銭
豆味噌	〃	一五銭	一九銭	上等	〃	八五銭	一円二〇銭

昭和 20 年 7 月 18 日

県下各地に赤痢の猛烈な蔓延(まんえん)は、実に恐るべき事態である。調査の結果、罹病者の多くは戦災者に依って示されている。発生地も鹿児島市・鹿屋等を筆頭に、大隅一円、薩摩の大部分に伝染し、当地さえ 4、50 名の患者を出したと云われる。

最近当地は、戦場になるべき目的を以て多数の兵隊が分散宿泊している。(「田んぼの中の春日町倶楽部にも、多くの兵隊さんが宿泊しておられた」と当時近くに住んでいた、現桜町に居住の K 氏が証言しておられる。)

昭和 20 年 7 月 20 日

今日、道路は疎開する物と人で一杯である。

昭和 20 年 7 月 24 日

月明りを利用して芹ケ野、金山の 2 ヶ所に生活必需品の一部を分散す。運賃荷馬車 30 円支払う。最近一番注目されているのは、食糧及び運賃の闇値の暴騰である。

昭和 20 年 7 月 27 日

午(ひる)過ぎ空襲警報発せられるや、無数の敵機が幾段となく波状攻撃をやり、各所に爆弾投下の音が殷々として響く。川内方面は、やられて大火災だとの報道もすぐ伝わってきた。鹿児島もやられたとの報告、暫くすると奇妙な唸りと共に、戦斗機(せんとうき)が眼前 2、30m に迫るや否や、盛んに機銃掃射を浴びせる。幸い我が頭上だったので、被害はまぬがれたが、頭上で射た弾は海岸の魚会社(現在の漁協)続きの油罐を射抜いたらしい。黒煙を吐いて今燃え続けているとのこと。最初の機銃掃射だっただけに町民の驚きは大きかったようだ。田に働く人も道具もそこそこに逃げ帰った者が多かった。壕の必要性が痛感せられる。

昭和 20 年 7 月 28 日

米ノ津町立青年学校の山藤伍長他 1 名、夕方訪問を受く。現地加世田部隊に勤務、出張目的「脱走兵 2 名探索(たんさく)のため」。

何分広い土地に他国からの部隊で一杯であれば、探し出すことが困難で、只今のところ五里霧中の有様。夕食後夜行にて帰営される。

昭和 20 年 7 月 29 日

昨日、川内市向田町一帯がやられた。敵機愈々熾烈(いよいよしれつ)の度を加え、我が町へも迫って来る。

昭和 20 年 7 月 30 日

今日も敵機はやって来た。十数機、日毎に増して機銃掃射を浴びせる。川内を爆撃して帰りには必ず機銃することに決めているらしい。今は機銃だけだが、爆弾でも投下するようになったら、どんなに町民が恐怖に怯えることであろうか。役場には思う存分機銃掃射した後、伝単をまき、「午後又来る」とか子供脅しのようなことを云っている。

註　伝単－飛行機からばらまかれた宣伝ビラの事。

疎開は夜を徹して行われ、人達の足音、狂気じみた甲高い女の会話、牛馬車の軋る音、夜明けとも思われぬ騒々しさ。

昭和 20 年 8 月 4 日

疎開者の運ぶ荷馬車の音も、後を断ったかの観がある。最も驚かさるべき事件は、何百軒もの家が留守であることである。3 日も 4 日もどこで何をしているのだろう。役場、警察あたりでは、しきりに帰宅を催促しているが、恐れる民はなかなか命令を聞こうともしない。

仕方なしに町当局では、疎開して留守の家屋は取毀しを命令したとかで、又戦斗員 1 人は必ず家を守ること、など強い達示があったらしい。

避難先の蜜柑畑にも横穴壕を掘るとのこと。先日師団長が来た時の談話に、

「当地も今後の空襲に備えて、高射砲をうつことになるだろう。土地の人々は、この弾片の被害を除くために壕を掘るように」との事。

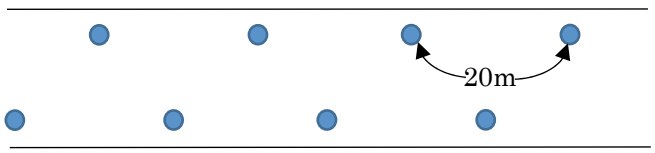
昭和 20 年 8 月 5 日

2、3 日振りに好天気に恵まれた今日、敵機の来襲を予想していたが、朝からの警報に人々が今日か今日かと待ち構えている。然し、午前中は 2、3 回警報が発せられたのみで、敵機は姿を見せなかった。

正午となるや否や、平常通りの爆音がごうごうとやって来る。2、3 里南の方で 1 回機銃掃射を加えるや、待機していた高射機関銃が一勢に火を吹く。敵機は悠々と遁走してゆく。又程なく 5 機編隊のＢが、超低空をなし串木野の上空を北東へ旋回してゆく。川内を空爆するのだろう。音もなくすべるように突っ込んでゆく。三井の山に姿を消したかと思う間もなく、投下する爆弾の音が次々に連続して聞える。約 5 分ばかり爆撃したかと思うと、逃げるように他の上空を翔ける。又数分にして上空にやって来ると云う具合で、神経戦をねらった旋回飛行だ。

3 時すぎ漸く空襲解除のサイレンがなる。皆安堵して胸をなでおろしながら壕の中から出て来る。

退避に備えて直径 1m、深さ 1m50 の蛸壷壕を、道路両側に 20m 間隔交互に掘る。



昭和 20 年 8 月 7 日

空襲の頻襲は、益々熾烈の度を加えて来た。

昭和20年8月8日

昨日午後、敵機2機来襲、当地上空数十分旋回後、数回にわたりて機銃をなす。家屋の損傷はなかったようだが、北海道の漁撈(ぎょろう)班の兵隊が沖合で漁撈中、機銃を受けて2名即死、3名重傷を出した。

昭和20年8月9日

昨夜から寝冷えのため一晩中下痢に苦しめられ、暁方(あけがた)になって夜の疲れで何時間だったかぐっすり眠ってしまった。今悪疫が流行するので、用心のため梅汁を飲んで腹の調子も漸く具合よくなって来たと思う頃、毎日の客人が空からやって来た。

今日はやるぞ、何だか変な予感がした。敵機は数回にわたって注意深く偵察しながら急降下を試みる。やゝ少時(すこし)して10時過ぎだと思ったが、多発爆撃機の超低空急降下を開始した。バリバリバリと銃の音がしたと思う間もなく、次から次の連続黄燐(おうりん)油脂爆弾の投下、板をつき抜ける不気味な音が耳許(みみもと)に聞える。小さい私の家でさえ20発からの銃弾を受ける。1発の如きは寝ている頭許(あたまもと)に落つ。運が強いというのか、命がまだあったのか、とにかく命拾いした感じだった。だが敵機は更に数回の銃撃を試みる。

私は、半ば観念した心持で静かに目を閉じると、ヂリヂリ焼けくさいにおいがしてくる。変に思って眼を開くと、おゝ燃える、私の隣の家が燃える。あっ、その隣の家も燃える。私は身を半(なか)ば起こして北側の窓を眺めると、此れ又何としたことだろう。一面もうもうと黒煙を上げつつ燃えるではないか。あゝ町はとうとう火の海だ。数分とせぬうちに空は煙のためにあやしくなって来た。避難の群(むれ)は、上空の爆音も聞こえぬかのように火の手を免(まぬ)がれようと、裏の田の道を逃げてゆく。子供の泣声、子の名を呼ぶ母親の狂った声、老若男女を問わず、夜具を着て走る者、荷物を背負いて走るもの、蟻の行列のように我先きにと、かけてゆく。時々上空より急降下してくる敵の機銃に皆の足はすくむ。然し火から一寸(ちょっと)でも遠くはなれようとする避難民の群は、猶も山へ河へと走りつづける。空は夜のように暗くなる。降りしきるこげくさいにおいの灰が遠くから吹き込む。風は、たつ巻でも起こったかのように轟轟と音を立てて激しく吹き出す。

敵機は脱出したのだろう。爆音も聞こえなくなった。家屋は全部焼かずにはおかぬといった勢いだ。列車もやられたのか、盛んに燃える。

産業組合が燃える。穀物の配給をなす場所だ。緊急対策として米穀の特配をなしていたが、未だ配給を受けていない者も相当あったろう。そのために、倉庫から持ち出された米穀らしい。火は夜に入るにしたがい下火になったが、組合だけは猶火の勢いが盛んになる。夜になってもえんえんとして空を朱に染め、実際焼跡を通して見る景色は、一種何とも云えぬ美観さえ感ぜしめる程であった。

倉庫は(駅下の石造りの倉庫)幸い無事だ。家屋は殆んど焼けた。夜の空には美しく星が光っている。何もなかったかのように。焼け出されて、あたりに家がなくなったためか静かだ。時折黄燐のにおいが鼻をつく。

夜になって友軍機が飛ぶ。爆音に怯えた人達が金切声で「爆音！」と叫ぶのがいらだたしい程憎い。切角(せっかく)よい気持ちで寝ているのにと思った。真夜中になって敵機の爆音が聞こえる。だが、投弾するようなことはあるまいと思ったが、予期に外れた。大きな爆弾1発見舞い、遠隔の地で、とてもと思われる自分の家が爆風のため損傷を被(こうむ)る。敵機は猶も飽き足らず、えんえんと燃え

る組合に機銃を浴びせる。下から応射する。敵機は1回だけで遠ざかって行った。あとは兵隊らしい声が時々聞こえる。もとのように静かになってゆく。今日こそは忘れようとしても忘れられない印象深い日になるであろう。部落には、長島家、浜根家と私の家が残っているだけである。〔註1〕

〔註1〕　実際には、長島家の東側に2、3軒と、田んぼの中にあった春日町倶楽部(公民館)が焼け残っていた。

昭和20年8月11日

今日も相変わらず数回機銃掃射をなしたのみで、数十分旋回後、当町を脱出。然し4、5里遠方では爆弾の炸裂する音がする。

戦災者に対する焼米の配給があるとのことで、1日分2合当(あて)、7人分の給与を受く。代価無償。配給受領要領は、町長の罹災証明を受けて、米穀特設配給所で受く。先日の火災のため町の精米所全部焼く。米穀の配給は、今後生福まで行かなくてはならぬ。

昭和20年8月12日

午前8時、敵機来襲退避信号がなったかと思うと、音もなく敵機の急降下、今まで残っていた平江・大原・駅・散在している森に対して機銃と共に焼夷弾を投下。

部落には誰1人も居ない。私と鶏9匹だけの生活である。人間が居なくなると、鶏だって人間のように愛情が湧く。鶏も又、無人家等には決して足を踏み込まない。萬物(ぼんぶつ)は皆、共同の生活を知らずのうちに楽しむか？　毎日卵を1ヶ、2ヶ宛提供してくれる可愛い奴だ。

昭和20年8月13日

焼野原の焼けくさい中に点在している家屋には、誰一人として姿を見せない。広々とした野原をトンボが焼木立の間を飛んでいるのは、心から生命の自由さに感謝される。空は飛雲が去来している。静かな中にも夏らしく感じられるのは、蝉の声と青田の美しさである。

今では蝉の声さえが喧(やかま)しくなくなった。竿の先に静かに赤とんぼが止まっている。何を考えているのか。里いもの大葉がかすかに風に戦(おのの)いている。静かだ。人間は私を除いて此の地上にはいないのだ。人間はどこの世界に去ったのか。それとも夢でもみていたのか。足音さえ聞こえない。静かな世界を太陽だけが迎えてくれる。私はそれで無上の満足を感じている。何時(いつ)でも私は、このまま自分の生命(いのち)が消失しようとも、少しも惜しむ気持ちは無いと確信する？　私は町の中にいて此のような大きな静けさを感じた事は未だかつてなかった。恐らく私1人が感ずる体験だろう。

(両親や、いとこのK子氏などが、I氏に山へ疎開するように勧められたが、氏はここを離れようとはされなかった。)

昭和20年8月16日

昨日(15 日)、国民学校(今の小学校)で警察及教職員を招待して、ラヂオ聴取会を開催せし模様である。

昭和 20 年 8 月 18 日

S さんの家族の者は、何処(どこ)まで逃げるつもりか、あちらに 2、3 日、こちらに 2、3 日と毎日のほど、重い食糧物資を背負いて歩く。惨とも哀れとも何とも表現出来ない。

昭和 20 年 8 月 19 日

今日の午後、上伊集院より K 子帰宅す。4、5 日前の無条件降伏云々(うんぬん)の問題のあった頃、伊集院方面では、敵の上陸の噂が流布して婦女子を全部隠せとの大騒ぎがあった。

昭和 20 年 8 月 20 日

Y 子は、今度(このたび)動員解除となって今日帰郷す。

「故郷が全焼となったと聞いたのは、無条件降伏をした 15 日の日だった。早速動員解除の命令が出たので、2、3 日準備して帰ろうと思ったが、寄宿舎の舎監が明日此所(ここ)を立ちのくように指令され、1 日分の食糧を貰って出たのが 18 日、列車の故障連絡の不備で 3 日間かかった。19 日の朝、列車の中でにぎりめしを 1 つ貰って食べたまゝ今まで食べてなかった」と云う。

「そうだろう。米が仕掛けてあるから、炊(た)いて食(く)えよ」

と云ったが、疲れて炊く元気もなかったのだろう。昼飯が少し残っていたからそれを与えた。よほど腹が減っていたのだろう。美味しそうに食べていた。

昭和 20 年 8 月 23 日

8 月 22 日 5 時大本営発表

1、我ガ軍代表川辺中将ハ 19 日マニラニ於テ聯合国側代表トノ間ニ停戦協定ニ調印ニ終了シ 21 日帰京セリ

2、連合国側ハ 26 日及 28 日ニ横須賀地区ニ進駐スルコトニ決ス

3、敵軍ノ進駐ハ平和進駐ナルヲ以テ国民ハ心配スルコトナク食糧増産ニ励ムコト軽挙妄動シテハナラヌ

4、進駐軍ノ食糧ナドハ聯合国ニ於テ準備保証シ我国内ノ食糧物資ナド徴発スルコトナキヲ以テ心配スルナ

5、戦災者ニ対シテハ政府ハ絶対救済スル

昭和 20 年 8 月 25 日

戦災者に対して 5 才以下の子供のいる家族に対して、枕・蚊帳(かや)一張特配あり。

昭和 20 年 8 月 28 日

今度部落内に、新たに米穀配給所が開設されることとなった。場所は N さんの宅。今まで金山まで受領に行っていた。町役場へ趣(おもむ)き、米穀配給所指定変更届出づ。罹災者家族として下駄 2 足給与さる。

昭和 20 年 8 月 30 日

郵便貯金 1 口 300 円迄支払う(3 月 28 日まで)

罹災者、戦災者に対して 1 人当 200 円(学生・子供を除く家屋焼失者)支給さる由。

昭和 20 年 8 月 31 日

配給　塵紙(ちりがみ)1 束、ローソク 3 本、マッチ小箱 2 個(罹災者家族へ)

引揚げゆく兵隊の背中には、毛布・軍服を山の様に積んで歩く。

疲労のため、途中背の荷を捨ててゆく者もある。路傍(ろぼう)の人達が乞食のように飛び付くそうである。浅ましい敗戦風景。

罹災者 1 人に対して、50 円の救済金を支給(当町役場)。自宅は 7 人だが、最高支給額 300 円の規則によって上額を受く。

昭和 20 年 9 月 1 日

配給　米穀配給粗米のみ、麦は到着次第配給、8 人家族 7 キロ。

昭和 20 年 9 月 4 日

荷馬車、都合がつく。運賃 3 回分 75 円支払う。

昭和 20 年 9 月 6 日

食糧事情は益々困難になり、甘藷(かんしょ)1 貫目 5 円とは、今後の相場が懸念される。

昭和 20 年 9 月 8 日

戦災者 1 人に対し、甘藷 100 匁(もんめ) 無料配給。大詔奉戴日(たいしょうほうたいび)は無条件降伏後とりやめ、日曜日も従前通り休むことになる。

註　昭和 16 年 12 月 8 日太平洋戦争が勃発した。毎月 8 日を大詔奉戴日とした。

昭和 20 年 9 月 9 日

米ドル 1 ドルに対して 4 円 25 銭の換算率諒解。

配給(戦災者)軍服、16 才以上の男子のいる家族に対して 1 着宛 20 円　毛布、家族に対して 1 枚 10 円　金盆(かなぼん)〔註 2〕1 枚無償

〔註 2〕金盆は洗面器のこと。

昭和 20 年 9 月 16 日

当町の全戸数は、 5,600 戸ある。今度の戦災で殷盛を極めた 1 番繁華街を一朝にして灰燼(かいじん)に帰してしまった焼失(全焼)2,500 戸の損傷を出した。

戦災をこうむった各地では、罹災者のために寒い越冬を懸念して、バラック建造に真剣である。規格は 15 石(8 坪)、10 石(6 坪)の 2 通り。当町では年末迄に、2,000 戸建立の計画、平瀬町長大はりきり。

材木は、漁業者と農業要員の家族に現在、配給しつゝある。一般は、彼等の配給の完了を待って支給。材木は、10 石にて 250 円。

昭和 20 年 9 月 18 日

配給　醤油 1 升(1 円 50 銭)7 人家族、塩 2 ヶ月分 3 キロ 300 グラム(83 銭)

昭和 20 年 9 月 19 日

今度の台風のため、蔬菜の不足、米の減収、国民の食糧の状態は、甚だ危機に陥らんとしている。10 月よりの 2 合 2 勺(1 日量)復帰も現在の状態では可能とは思われぬ。

雇傭雑役一日分賃金 5 円支払う。大工の公定賃金 1 日 7 円 20 銭、外手数料 10 銭、計 7 円 30 銭。当町でも罹災者に対する建物の見本を役場前に建築してあるそうですが、大工に云わせると、採光の悪い事と屋根のしき方の始末の悪いことで、余りすゝめる事が出来ないとのこと。

部落にも規格標準の建物が建立しはじめる。労力不足と賃金に絡む給食の問題で、大多数の人が建立出来ずに居る。

昭和 20 年 9 月 20 日

今日から彼岸の入だというが、未だ彼岸の意味はよく知らない。何か佛教と関係があるように思われる。彼岸になれば、必ず寺に 1 週間のうち何日かは行かされたものだった。寺には高僧が招かれ、十数人の伴僧及び僧が読経し説教して、大きな寺の境内を蟻の動く事の出来ないほどの参詣人で一杯であったことを覚えているが、大きな寺として誇っていた寺も、空襲に依って一朝にして灰燼に帰してしまった。

魂のこもる所、魂を浄化する所、吾が将来の故郷の在り家を失った様な気がする。恰も焼跡の家なき故郷に帰り来る兵士たちのように、何を捉えればよいか漠然として放心状態である。有形無形を問わない。そこに永い年月の間に受けた印象から来る、或る何ものかの信仰を感ずる。

忘れていて忘れないもの、抜こうとして抜くことの出来ない、ある何ものかが、常に胸に秘められているように感じられる。

此のように矛盾した気持ちで、戦災のため日夜復興する中に、ふと斯様なことを思う。

(I 氏の日記は、ここで終わっている。)

(7)　『串木野駅史』

この史料は、大正 2 年 12 月 15 日の串木野駅設置以来、歴代駅長が代々書き足した串木野駅の記録で、駅の施設の拡張や変更、人事に関する記述が主なものです。この中に「天災事変其他事故ノ重大ナルモノ」という項目があり、そこに、大正 3 年の桜島の噴火や、脱線などの事故、風水害による線路の崩壊などの記述とともに、戦時中の空襲に備え疎開した記録、また空襲による被害の状況が記されています。特に 8 月 9 日の串木野空襲については「10 時 08 分」と時刻も記録されています。表紙の長崎に投下された原爆のキノコ雲の写真の奥に写る黒煙が、串木野空襲の黒煙であることを示す貴重な資料です。

8 月 9 日、午前 10 時 08 分の最初の攻撃には、アメリカ軍小型戦闘機が 9 機ほど来襲して機銃掃射を開始しています。続いて大型の攻撃機が 30 機ほど来襲し焼夷弾投下を行いました。

この 8 月 9 日の攻撃に参加したのが本書冒頭で紹介した、アメリカ陸軍第 5 航空団第 3 爆撃機群団所属の A-20 ハボック及び A-26 インベーダーです。

アメリカ国立国会図書館の記録では、A-20 ハボックが 17 機と A-26 インベーダー16 機の計 33 機が焼夷弾投下に参加しています。この A-20 ハボックなど大型機による攻撃の前に小型機約９機による機銃掃射が行われていますが、この小型機は入手したアメリカ陸軍第５航空団第３爆撃機群団の記録に出てこないことから、別部隊で大型機による攻撃を行う前の偵察機ではなかろうかと思われます。

これらの攻撃により駅構内及び町内の至る所で火災が発生しました。しかし、戦闘機の波状的な反復攻撃により、なかなか消火活動をすることが出来なかったことが記録されています。

10 時 38 分、敵機が去った時には素倉、貨物取扱所、貨物保管庫、便所、駅の青年寮、線路工手官舎 1 棟 2 戸、客車 5 輌、貨物 2 輌が全焼していました。またその時、線路分区官舎の板塀、客車 1 輌のデッキのほか、防空壕入口付近 3 ヶ所に集積していた枕木が延焼中であったため、駅の保線区員が手分けして消火作業に努め、11 時半頃に鎮火しています。その後、12 時 30 分頃には、湯飲み場所の天井から白煙が立ち昇っているのを駅員が発見し、すぐに消火しています。

駅舎、湯飲み場所、倉庫、油倉庫は、駅長、助役、分区長、各官舎線路分区員など全員の敢闘により類焼を免れました。

8 月 12 日午前 7 時 54 分には、敵機から 2 回目の攻撃を受け、町役場、串木野校、女学校、変電所を除き、殆んどが焼失してしまいました。

○『串木野駅史』より抜粋

一昭和二十年三月廿八日串木野木場茶屋間起点三六〇粁八〇〇付近線路上ニ墜落セル直径五米程度大岩石ニ一三二列車乗上ゲ機関車脱線転覆線路不通トナル、地方警防団及石工ノ応援ヲ求メ、岩石ハ石工ノ手ニ依リダイナマイトニテ破壊徹肖復旧作業ニ努メ、翌日八時復旧二四四列車ヨリ開通セリ、

一敵ノ沖縄占領ニヨリ、敵機ノ来襲日ニ日ニ烈シクナリ、七月廿七日ニハ鹿児島駅ヲ大爆撃シ、続イテ三十日川内駅ヲ爆撃及市内ノ焼夷攻撃等アリ、八月ニ入リテ益々頻度ヲ加ヘ、小型機ノ攻撃ニヨリ上東郷・市来・湯之元等ニ火災発生、当地ノ攻撃モ時間ノ問題トサレ、町民ハ町付近ノ各田舎ニ、遠クハ宮之城線各村等ニ避難シ一時死ノ町ト化シタル感アリ、駅トシテモ管理部ノ指示ニ基キ乗降場前面ノ切取ニ横穴延長、約三十米ヲ掘リ、七月末日迄ニ重要書類、乗車券、手小荷物切符、貨物通知書保管、手小荷物等ノ疎開ヲ完了セリ、

八月九日十時〇八分、敵小型機約九機来襲機銃掃射ヲ開始シ、引続キ大型約三十機ノ焼夷攻撃ヲ受ク、

構内及町内各所ニ火災発生セルモ敵小型機ノ波状的攻撃ノ為メ、消火作業出来ズ、十時三十八分敵機ノ脱去シタル頃ハ、素倉、貨物取扱所、貨物保管庫、便所、駅青年寮、線路工手官舎二戸、客車五輌、貨車二輌全焼シ、線路分区長官舎板塀、客車一輌ノデツキ、横穴防空壕入口付近三ヶ所ニ集積ノ枕木延焼中ニツキ、駅保線員各手分ケシテ消火ニ努メ、十一時半頃ニ鎮火セシメタリシガ、十二時三十分頃湯呑所天井ヨリ白煙ノ立昇ルヲ発見、直チニ鎮火セシム、

駅舎、湯呑所、倉庫、油倉庫、駅長、助役、分区長、各官舎線路分区等全員ノ敢闘ニヨ

リ、幸ヒ類焼ヲ免レタリ、焼失シタルモノ左ノ如シ、

一、建物

全焼　素倉、貨物取扱所、貨物保管庫、便所、駅青年寮、線路工手官舎一棟二戸

半焼　乗降場上家

一、客車

全焼　五輌

一部焼失　一輌

一、貨車

全焼　二輌

半焼　一輌

町内官公衛(衙)中、町役場、串木野校、女学校、変電所ヲ除キ、殆ド焼失セリ、八月十二日七時五十四分、第二回目ノ攻撃ヲ受ケ役場全焼、串木野校大半ヲ焼失セリ、空襲中、駅員及家族ニ一名ノ死傷者ナシ、(後略)

コラム

出征兵士が家を出る時は、バラを被り、片方の靴は後ろ向きに履いた

福園集落では、出征兵士が家を出る時は勝手口から出ました。その時、蚕用のバラ※を被り、片方の靴は後ろ向きに履きました。戦地から無事に帰って来るようにとの願いからです。バラを被るのは、戦地から帰って来る時に怪我ひとつない体であるようにとの願いからです。

【※バラとは、竹で編んだ平たい丸ザルのこと】

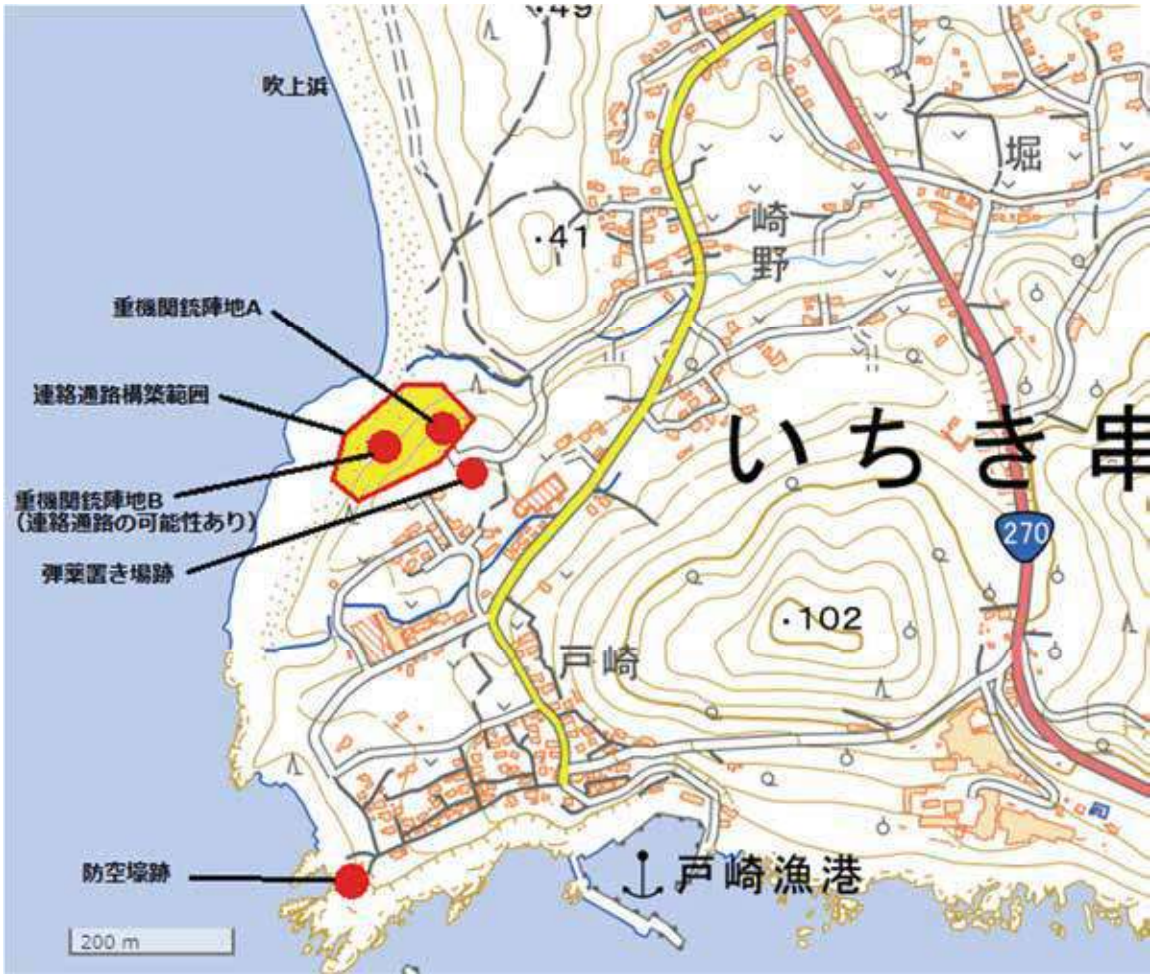
(参考文献　森田清美 1996『さつま山伏』春苑堂出版)

5　市内に残る遺構等

(1)　吹上浜沿いに残る重機銃陣地跡及び防空壕跡

戦局がいよいよ不利になり本土への爆撃が始まると市内の防空対策は急速に強化されました。シラス台地の崖面には防空壕が掘られ、民家の白壁や土蔵、焼酎工場の煙突などは迷彩柄が施されました。

また、昭和 20 年頃にはアメリカ軍が上陸するとされた海岸線を守るため、陸軍防備隊を駐屯させました。初めは北海道部隊が入りましたが、すぐに名古屋部隊と交代となりました。いずれも 500 人程度の人員で、海岸線に沿う丘陵地に陣地を構築しました。戸崎から八房川河口に至る海岸線に重機関銃陣地 16 ヶ所を構築する予定でしたが、戸崎地区に 2 ヶ所作ったところで終戦となりました。この 2 ヶ所が戸崎地区に残っています。



吹上浜沿いに残る重機銃陣地跡及び防空壕跡位置図

重機関銃陣地跡 A

崎野の台地の一番高いところに位置しています。上陸してくる敵を迎え撃つには絶好の場所にあり、この地域の重機関銃陣地はここから北側に向かって造られていきました。

重機関銃陣地跡 B(連絡通路か？)

奥は上部台地へとトンネル状になってつながっており、重機関銃陣地というよりも連絡通路ではないかと思われます。この通路を通って重機関銃陣地 A へと行けます。

重機関銃陣地跡 A 付近から吹上浜を臨む

重機関銃陣地 A 付近から北側を見ると吹上浜の海岸が一望の下に見えます。敵が上陸してきたらこれを迎え撃つには絶好の場所と言えます。

弾薬置き場跡(ライフハーバーいちきの北西側)

写真の辺りに弾薬を置いていたと言われています。現在は、何も痕跡は残っていません。

重機関銃陣地連絡通路跡

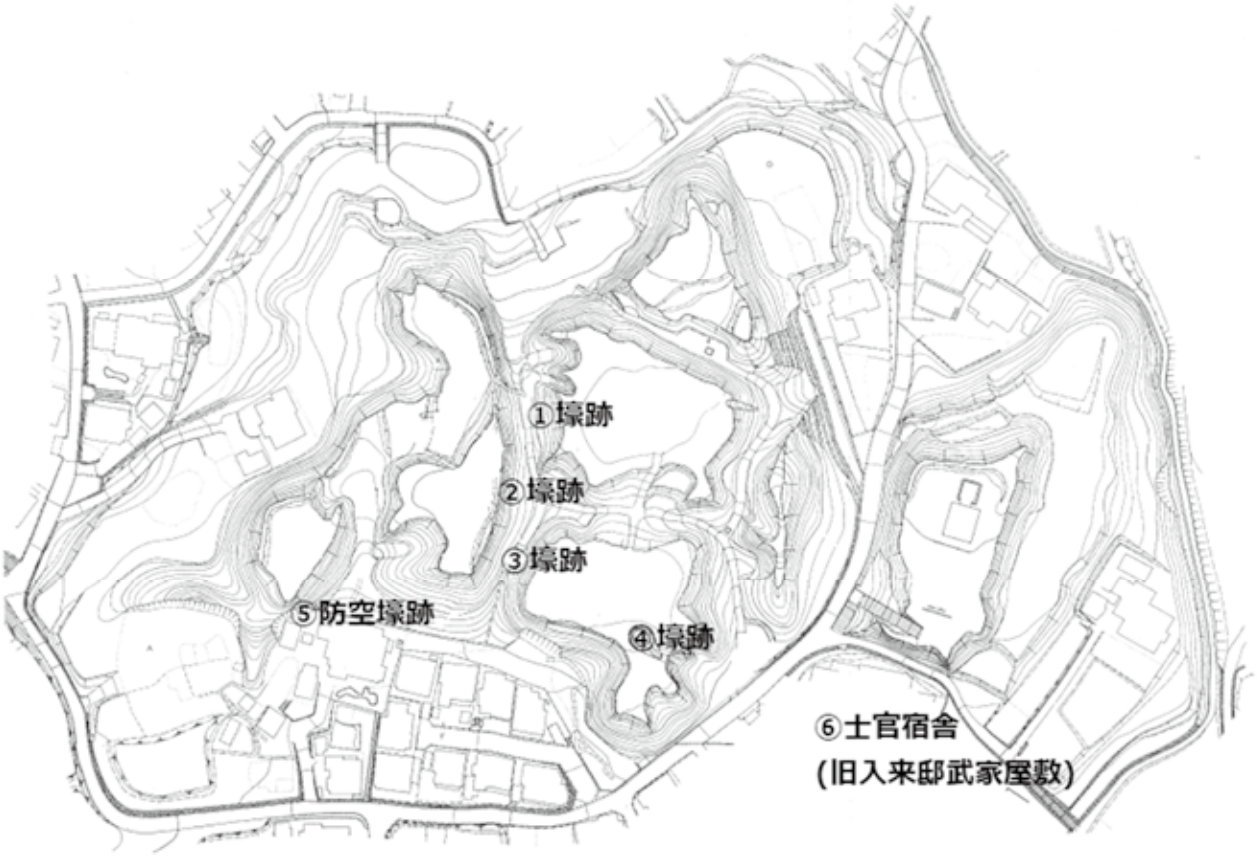
重機関銃陣地のある台地中程から海岸側に向かって網目状に連絡通路と思われる通路があります。敵の上陸に備えて兵隊が移動する目的で造られたものだと考えられます。

戸崎鼻の防空壕跡

防空壕内部(入口から奥側を撮影)

戸崎地区には戸崎鼻の海岸断崖に防空壕跡が残っています。防空壕の中は５m程進むと左に折れ、広い空間があります。これは空襲を逃れるために造られた防空壕です。

(2)　串木野城跡周辺の壕跡など



串木野城跡に残る壕跡位置図

本市の麓地区には中世山城である「串木野城跡」があります。建久年間（1190～1198）の頃、串木野三郎平忠道が築城していたといわれています。その後、5 代七郎忠秋の時、興国 3（1342）年に島津貞久に攻められ、それ以後は島津氏が入城し串木野を治めています。元亀元（1570）年には島津家久(島津貴久の四男)が隈之城の地頭となり、串木野城の城主となっています。関ケ原の戦いで有名な島津豊久(家久の子)もここ串木野城跡で生まれたと考えられています。

この串木野城跡には複数の壕跡が残っています。これらは、第二次世界大戦末期に本市に派遣された北海道部隊の駐屯地として活用されました。上図の中の①②は小さな壕跡で串木野城跡の堀切を活用して配置されています。中には人が 2 人ほど入れるようなスペースがあります。堀切を通ってくる敵を見張るための壕ではないかと思われます。③はそれよりも広かったと思われますが、今は崩れており確認できません。ここで紹介したものの他にも小さな壕跡が各所に見られます。

④は、部隊の装備などを隠した壕だと言われています（現在は、安全のために埋められています)。恐らくは天井部分が崩落したのではないかと思われます。この壕には士官宿舎として徴用された旧入来邸武家屋敷へと続く道が造られたと言われています。⑤は集落の方々が通路として使っていましたが、戦時中は防空壕としても使っていました。⑥は士官宿舎として徴用された旧入来邸武家屋敷です。白壁には、空襲を避けるために施された迷彩塗装の跡が一部、残されています。

①壕跡

②壕跡

③壕跡

④装備などを隠した大きな壕跡

⑤防空壕跡(集落で使用されていた通路を活用)

⑥士官宿舎(旧入来邸武家屋敷)　　※白壁に迷彩柄が残っています。丸印部分。

(3)　市来地域に残る慰霊碑

市来幼稚園と市来武道館との間に征清紀念碑や日露戦没紀念碑があります。当初、これらは市来小学校付近に建てられていましたが、中学校建設や道路拡張などにより昭和 44 年に慰霊塔とともに現在の地に移されました。

これらは戦争で亡くなった旧市来町出身者を祀るために建てられました。

①慰霊塔

【碑文】

市来町出身者にして戊申の役以降、大東亜戦争に至る各戦役に夫々参加せられ勇戦奮斗の末戦没せられた忠勇なる諸士並に公益のため殉職せられた偉功を永久に伝えると共にその英霊を慰めるため市来町民こゝにこの慰霊塔を建立する

昭和三十一年四月建之　市来町　(原文ママ)

①慰霊塔

②征清紀念碑(明治 32 年建立)

③日露戦没紀念碑(明治 39 年建立)

※征清紀念碑及び日露戦没紀念碑には戦没者の名が刻まれています。

(4)　野崎欽一顕彰碑

ア　野崎欽一顕彰碑

市来神社の境内奥の右側にある石碑は、大東塾の塾生で、昭和 20 年 8 月 15 日の終戦の後、塾生らとともに皇居で自決した野崎欽一の記念碑です。

『市来町郷土誌』(昭和 57 年、市来町)によると、野崎欽一は大正 13 年市来町に生まれました。

昭和 20 年 7 月、大東亜戦争の戦局が悪化するや上京して、大東塾(昭和 14 年創立)の塾生となりました。大東塾は影山正治を塾長とし、塾生と生活を共にしながら人格の陶冶・徳性の錬磨を図り、また相撲・農作業を通して日本精神と国家神道に徹した人間の養成を目ざし、修養年限は 1 か年とし、常時 20～30 人の塾生がいたといいます。そして、日本が敗戦したとき「天皇陛下に申しわけない。この上は死して護国の鬼となり、祖国日本をお護りしよう」と誓いました。

8 月 25 日早暁、塾長代行影山庄平以下 14 名は東京代々木練兵場にて割腹自刃しました。この時野崎欽一は 22 歳でした。

この記念碑は当初、市来庁舎近くの菅原神社内に建立されました。建立の建設資金は当時の金額で 200 万円を越えるものでした。昭和 50 年 11 月 24 日、影山塾長をはじめ、遺族や地元旧市来町の有志、また県内外から 200 人近い人々が参集し除幕式が行われました。

イ　西之園守夫氏(市来町出身　大口南中校長)から見た野崎欽一

野崎欽一については、昭和 50 年発行の『町報いちき「終戦特集」』にも掲載されていたので、以下抜粋します。

(前略)

8 月がめぐり来るごとに、どうしても終戦の日前後のことどもが思い出され、戦いにたおれた多くの先輩、友人たちのことがよみがえってくる。その中で終戦直後割腹自決された私の畏友野崎欽一さんのことは、とくに深く感銘しているところである。

野崎さんは大正 12 年 9 月 13 日に土橋町に生まれている。専売所勤務のお父さんの関係で、市来小には 3 年生までしか出ておられないようである。

一中(現鶴丸高等学校)から七高(旧制第七高等学校造士館)に進まれたが病気のため中退、一時は小学校の教壇に立たれた。そのころ「ひむがし」という歌壇雑誌を通じて大東塾につながりをもたれた。

そのころの歌に

　とぎとぎし剣を己に刺さずては
　　大きな神道いかでか進まむ

という一首があるが、自分で自分の心に自刃を突き刺し、神の子として生まれ変わろうとする厳しい内省だと思われる。

しかし、戦局はいよいよ危急の度が強まるばかり、ついに 20 年 6 月末、意を決して上京、大東塾に入り、懸命の活動に入られたが、とうとう 8 月 15 日を迎えられた。当時、出征中の塾長

に替わって大東塾を指導しておられた影山庄平翁以下 14 人の方々は、この空前の悲痛事態に際会し、「この敗戦は国内の腐敗堕落が根本的な原因だ。われわれの努力と誠意が足りなかった責任は大きい。この上は自分たちの生命を捧げて霊魂となって天子様にお仕えし日本を守り続けよう」と割腹自刃を決意された。

そして自刃の日を 8 月 25 日早朝、場所は代々木練兵場の西端と決め、これからの毎日を静かな中に、いろいろな整理や自刃の準備にあてられた。自刃の段取りも細かに立てられ、それぞれ遺書を書き、切腹の練習もされた。24 日には、共同遺書に最後の祈りをこめて 14 人の署名がなされた。

(後略)

(引用文献)　市来町 1975『町報いちき「終戦特集」第 56 号』

(5)　串木野地域に残る慰霊碑

ア　「慰霊之碑」【所在地　浜ケ城　串木野神社境内】

【刻字】

正面　縦書　『慰霊之碑』

横書　『趣意　昭和 12 年 7 月 7 日　日中戦争開戦　つづく昭和 16 年 12 月太平洋戦争(大東亜戦争)がはじまり　昭和 20 年 8 月 15 日　熾烈な戦火が終えんして 40 年戦争の思い出は遠ざかり　正に風化しようとしています　かかるとき　遺族会では酷寒炎暑に堪え悪疫窮乏と戦いながら　ひたすら祖国の安全と繁栄を祈りつつ　身命を国に捧げられた英霊 1400 余柱の殉国の精神をここ串木野神社の霊地に永久に伝承するため　慰霊碑を建立する

昭和 61 年 11 月　串木野市遺族会　』

※　背面には、串木野市遺族会員の名前が刻まれています。

ア「慰霊之碑」

イ「支那事変　大東亜戦争　戦没者」の記念碑

イ　「支那事変　大東亜戦争　戦没者」の記念碑【所在地　浜ケ城　串木野神社境内】

【刻字】

正面　右側　縦書『支那事変大東亜戦争　戦没者名南畦書(角印)』

※　全体で 1,420 名近い数の戦没者名が刻まれています。

ウ　日露戦役従軍馬紀念碑【所在地　浜ケ城　串木野神社境内】

【刻字】

正面　『日露戦役従軍馬紀念碑』

左面　『碑　誌

富国強兵之策一而雖不足充實軍備内奨励農工外擴充國權開生産之路無急増進國利民福近時戦闘之術進各國競厳兵備政府大有所見鋭意熱心用心馬政唱導馬匹之改良誌措經営以所以備萬一之者豈偶然哉岩明治三十七八年之交日露戦□釁干戈相見於北清之野□到弾雨下将士爆死流血殞命於鋒鏑者不有遑屈指際邦家有事之日尽努力全奉公之道□國民之常義臣子之天分也矣我串木野村下名有馬匹之戸数五百戸應徴発馬数達于百五十頭斃于軍約三十頭雖頑迷不霊之獣為社稷至所以全報之義豈復是經庭哉□嗟悲矣茲同志相謀醵金建設紀念碑吊馬霊聊誌一言以傳後世云爾

維時三十九年一月十八日　大久保徳四郎　撰之

串木野村下名同志連中(※　以下13名の名前が刻まれています)　』

※　右面にも25名の名前が刻まれています。

【解読】

富国強兵の策、一にして軍備を充実するに足らずといえども、内に農工を奨励し、外に国権を拡充し、生産の路を開くことは急がずとも、国利民福を増進することが大事である。近頃戦闘の術を各国が進め、競って兵備を厳にしている。政府大いに見るところ有り、熱心に馬政に心を用い、馬の改良を唱導し生産を施し、以て万一に備えるは、豈偶然であろうか。時に明治三十七、八年、日露戦争は血塗られ、北清の野に到り弾雨下に将士は爆死、流血、命を鋒鏑(兵器)に落とした者が、指を屈するに遑(いとま)もない(数えきれない)。わが国の有事の日に際し、努力を尽くし、奉公の道を全うするのは、国民の常義、臣子の天分である。我串木野村下名に馬匹の戸数五百戸有り。徴発に応じた馬数は百五十頭、軍(いくさ)に約三十頭が斃(たお)れた。頑迷(がんめい)で魂のない獣と雖も社稷(しゃしょく)(国家)のため報効の義を全うす(力の限り尽くしてくれた)。復是悲しむに(人と軍馬の間で)へだたりはない。茲に同志相謀り、醵金(きょきん)して紀念碑を建設し馬霊を弔い、聊(いささ)か一言を誌し、以て後世に伝えるものである。

ウ「日露戦役従軍馬紀念碑」

エ「征清従軍紀念碑」

エ　征清従軍紀念碑【所在地　浜ケ城　串木野神社境内】

【刻字】

正面　『征清従軍紀念碑』

左面　『海軍大将従二位伯爵　樺山資紀　書』

背面　『明治三十三年五月建設』

※　台座に従軍者の名前が刻まれてあります。

オ　忠魂碑【所在地　浜ケ城　串木野神社境内】

上段に書かれてある『忠魂碑』の文字は判読できましたが、それに続く碑文と下段に書かれてある名前は判読困難でした。ただし文末には『明治四十三年十一月』と年号が刻まれています。

オ「忠魂碑」

カ「忠魂碑」

カ　忠魂碑【所在地　浜ケ城　串木野神社境内】

【刻字】

正面　『忠魂碑』

左面　『元帥公爵　大山巌　書　角印』

右面　『明治四十三年四月三日建立』

キ　海軍少尉候補生橋口戸次郎君之碑【所在地　浜ケ城　串木野神社境内】

二段目に『海軍少尉候補生橋口戸次郎君之碑』とあります。

キ「海軍少尉候補生橋口戸次郎君之碑」

ク「招魂冢」

ク　招魂冢【所在地　浜ケ城　串木野神社境内】

※　石碑が前後になっているのは、石碑②の「招魂冢」(川口雪篷 揮毫)の「魂」の字が欠損したため、明治 42 年に再度石碑①を建てたためです。

石碑①正面　『招魂冢』

背面　『明治四十二年七月　再建』

※ 正面の薄い石碑に隠れて、本来の「招魂冢」があります。明治 10 年の西南戦争で戦死した 38 名を祀っています。

石碑②正面　『招魂冢』

右面　一番上に横書きで『明治十年二月乃至』

このすぐ下に縦書きで、出発月ごとにまとめて戦死者名が刻まれており、文末に縦書きで『明治十二年十月二十七日建』と刻字があります。

この面の下台には縦書きで、『串木野市水道水源地関係ニヨリ昭和廿六年十月廿七日五反田ヨリ串木野神社境内ニ移転ス　西郷吉之助書　　建設委員　遺族　奥田又一郎　同　野元義雄　　宮司　樋之口与四郎』と刻字があり、この周囲にも出発月ごとにまとめて戦死者名が刻まれています。

ケ　日露戦役紀念碑【所在地　浜ケ城　串木野神社境内】

【刻字】

正面　『日露戦役紀念碑　海軍大将伯爵東郷平八郎　書』

背面　『明治四十三年四月三日建立』

ケ「日露戦役紀念碑」

コ「日露戦役紀念碑」

コ　日露戦役紀念碑【所在地　生福】

【刻字】

正面　『日露戦役紀念碑』

右面　『明治四十二年二月十一日建設』

左面　『明治三十七八年戦役』

※　台座部分には、合計 65 名の戦死者名が刻まれています。

サ　忠魂碑【所在地　東島平町】

【刻字】

上部　正面　『忠魂碑　陸軍大将　南次郎 書』

※　右面、左面、背面、台座部分には戦死者名が刻まれています。

サ「忠魂碑」

シ「平和の礎」

シ　平和の礎【所在地　羽島　白浜(白浜公民館の敷地内)】

【刻字】

正面　『平和の礎　平成七年八月建立　大東亜戦争　戦没者名』

※以下 18 名の名前が刻まれています。

背面　『大東亜戦争従軍者名』

※　以下 48 名の名前が刻字されてあります。

ス　忠魂碑【所在地　羽島　羽島﨑(羽島﨑神社の境内)】

【刻字】

正面　『日支 / 大東亜　忠魂碑』

※　周囲には約 150 名の名前が刻まれています。

ス「忠魂碑」

編集後記

『民話・祭り編』・・・楽しいですね。民話には「はてな？」のナゾ解きがあって、それぞれ解説があるし、「祭り編」は、色とりどりの行列や山車や踊りが写真で見られます。令和 3(2022)年中止になった「七夕踊」もこの本で概要はわかります。国の無形文化財が中止に追い込まれた原因は何なんでしょうか。しかし、考えてみると、明治中頃、かなり多くの棒踊があったのに今は少なくなっています。『入来定穀日誌(明治 17(1884)年 2 月 14 日)』の招魂祭に描かれていた 28 か所の棒踊は、人々になじんでいたのです。今より貧しい人々の多い時代の方に、なぜ棒踊は多かったのでしょう。現在、祭り・芸能は明治時代の 3 分の 1 ぐらいに減っています。お祭りなど、その地域の行事は、人々を元気にするものです。七夕踊が中止になっているときの地域がどういうものであるか、今から復活へ向けての道筋を注意深く記録していく必要はないものでしょうか。

『金山編』・・・明治時代は五反田・荒川・羽島と盛んでした。明治 42(1909)年には金鉱石を砕く水車が市内に 202 台ありました。それが、明治 41(1908)年 2 月になると、一般よりいち早く電化され、徹夜で鉱石を砕く音が響いていました。水車は全部なくなりました。今では金鉱山が残っているのは鹿児島だけです。ですが、金は今は最も必要なものです。スマホを始め、コンピューターの配線には欠かせません。なぜなら、金は加工しやすく、電気抵抗が最も低い金属だからです。なぜ、日本の金鉱山は復活しないのでしょうか。

『古文書編』・・・その土地の実情がわかるだけではなく、他の土地にも影響があることがわかります。市来の川口改所(番所)に行き来した船から、どこまで交易をしていたかが想像され、市来湊町がいかに繁栄したかも想像できます。これらの文書は、元々は役所の文書で、現在で言うならば「公文書」に当ります。もともと役所にあったものですが、役所の場所が移動して、捨てるものを欲しい人々へ渡しました。例えば、神社に関係ある文書は神主へ渡したのです。現在も市役所で公文書はたくさん作られ、何年置きかに廃棄されています。これは極端に言えば、歴史を捨てているようなものではないでしょうか。公文書館を早く作って保存してもらいたいものです。

『戦争編』・・・負の記録でしょうか。明治から大きな戦争をしてきた日本。ウクライナへ続くものでしょうか。

第二次世界大戦の最中、国策と言ってはいますが、羽島婦人会の活動の記録を読むと、いかに国民を追い込んでいるかがわかってきます。羽島婦人会の活動の記録は、国が行った戦争が庶民へどういうことをしたかの貴重な記録です。

また、病身であったがために、焼夷弾で家の周りが燃えている中、冷静に記録している、春日町の日記には感動しました。記録があることは大切なことです。

2023 年 2 月 10 日　　所﨑　平

所﨑平　編集委員長

私は戦争を知らない「幸せ」な部類に入るかも知れない。二・二六事件などキナ臭い事件が起こる昭和 11 年に生まれているが、その年に中国山東省青島市から串木野に帰ってきて、戦後すぐ住むことになった家を作り、また青島市へ帰ったからである。小学 3 年生の夏、8 月 15 日の敗戦の詔勅は少し離れた日本人の家で聞いたが、ガーガーピーピーと私にはわからなかった。その年の 12 月 19 日串木野に引き上げた。それから食糧難の嵐に突入した。一つは不在地主という、戦時中にいなかった者の土地は全部そこを借りていた人と自分の兄弟に所有権が移ったため、自分が建てた家と敷地だけになった。7 割ほど減った。そこでカライモなど植えて、という訳にはならなかった。オマケに都市計画で道路に所有地の半分は出した。「弱り目に祟り目」で、家族 8 人は耐えなければならなかった。しかし、生きて行けた。学校も就職も結婚も、その後は順調だった。これを「幸せ」と言わねばいけない。

戦争の最中、機銃射撃や爆弾・焼夷弾によって、家を失い、命を失った、疎開で苦労した、などなどを一切、私は知らない。やはり「幸せ」の部類に入るだろう。

今回の「戦争に関する記録」を読むと、また、意外な面を見ることになった。「羽島婦人会の記録」は、いかにして国家が人民からお金や物資を吸い上げるかが生々しく、驚いた。それに反し、戦死した兵士への一時金や遺族年金の大きさ。兵士と同じように死んでいった庶民には何一つ出されない。私どもは戦死した兄の遺族年金まで当てにしなければ、我が貧乏な家は凌いでいけなかったのだ、と知った。

また、春日町の日記は生々しい。爆弾や焼夷弾が落ち、周囲は燃えているが、自分の家は燃えなかった。そのような状況を冷静な眼で捉えている。

南方での戦線で、食料がなく、毎日、両手二握りの草を集めて皆で食べた。何の味もしないのには毒がない。しまいには死んだ兵隊の肉まで食べた。いばっている命令者を戦闘の時に撃ち殺してしまえ、などと思った。などの話を聞いたときは、泣きに泣いた。話した人は温厚なお爺さんであったが、それ以来、戦争の話は聞きたくなかった。

この「戦争の資料」を読むと、これらのことを思い出して、胸が苦しくなる。

やはり私は戦争を知らない「幸せ」な部類に入るだろうと思っている。

森田清美　編集委員

今回の編集は、私にとって非常にレベルの高いものでした。そのために多くのことを学び、興味深く、自分自身にとって学術の面で向上する面が多いでした。過去の郷土史料集では『民話・祭り編』が印象に残りました。民話では「カッパの恩返し」「花もれどん」「別府ニセの韋駄天走り」「白いもののきらいな松尾神社の神様」などが印象に残り、興味をそそりました。特に「別府ニセの韋駄天走り」は、甑島の塩田家に残る古武術が別府にも残っているということが史実としても伝承としても民俗学的にも貴重なものと思われます。次に「白いもののきらいな松尾神社の神様」については歴史的に考えさせるものがありました。即ち、串木野三郎と戦った荒川太郎は源氏なのか平氏なのかを解決する一つのヒントにもなりました。

又、祭りでは「太郎太郎祭り」「びようびよう祭り」「ガウンガウン祭り」が芸能の歴史のうえで学ぶことが多いでした。このような呼び方は薩摩川内市にもありますが、国分、姶良地方の「春祭り」と比較して、歴史上、古い名称を残していることに強い印象を残しました。

次に郷土史料集では『金山編』の編集に興味を持ちました。薩摩藩としては金の産出量が、当時は全国でも多い方でしたが、串木野鉱山が荒川・羽島まで及んでいることに感動しました。筆者が荒川に住んでいたとき、昔は金鉱石を水車小屋まで馬で運んだものだったということをよく聞きました。伝承と史実が一致したことに郷土史料集編集の手応えを感じました。

徳重涼子　編集委員

本市の郷土史料集出版にあたり、調査・編集に最初から関われたことは、私にとってとても有難いことでした。聞き取り調査・古文書解読や新たな史料発掘など、地道で根気のいる作業の連続でしたが、民俗学・宗教学・古文書学その他の分野に精通する先生方と一緒に、色々なお話をお聞きし、また、互いに意見を出し合いながら編集作業することはとても楽しいものでした。

4 巻を通じて様々な思い出がありますが、特に史料集 3「古文書編」の金鐘寺の項で、開山了堂和尚のこと、2 代竹窓和尚と能を大成した世阿弥との関係について知ることができたことは、市来氏時代を研究する私にとって貴重なことでした。また、湊の菅原神社が海から起こった竜巻で壊れたが、それは菅原神社の神様が身を挺して町を守ってくれたのだという棟札を残した当時の湊町の人たち、海江田家文書で、本市で最も古い天正 20 (1592)年の領地目録が見つかったことも印象深いことでした。

史料集 4「戦争の記憶編」の羽島に残された「羽島婦人会記録」は、大日本婦人会の下部組織として串木野支部などの活動が分かる資料です。よく残されていたと思います。串木野神社境内に建立された日露戦争で亡くなった軍馬を慰霊する記念碑は、難解な文字や摩耗した箇所があり、解読に苦労したのもいい思い出です。解釈の間違いなど、修正してくださることを期待しています。

本市にはまだまだ手付かずの史料や石碑の類が残されています。息の長い事業として継続されることを期待しています。

寺田緑　編集委員

私は、分野の異なる 4 冊の資料集に何らかの形で携わらせていただき、調査・編集の過程ではいくつもの知られていなかった資料・古文書類を発見し、伝承を記録することができたと思います。しかし、未だ未調査の古文書類が多くあり、今後も調査を継続する必要があると考えます。

個人的に印象深いのは、「古文書編」で串木野城に関する古文書を解読・検証し、串木野の地頭とされていた島津家久が、10 年間串木野の領主であったことを確認し、誤りを訂正したことです。これは研究者の間では周知のことでしたが、すでに刊行された「串木野郷土史」の記載を訂正することはできないので、再検証できたことも、この事業の成果の一つであると思います。

最近では、個人がＳＮＳなどを通じて情報収集・発信ができるようになり、地元の「あたりまえ」はもはや「あたりまえ」なだけでなく、地域の財産となる可能性をも秘めています。そのような状

況だからこそ、地域の歴史・文化を伝え、文化財を活かすためにも、郷土に残る資料の調査・記録、そしてそれを発信する作業はとても大切なことであると強く感じました。結びに、ご協力いただいた方々、関係者の皆様に感謝申し上げます。

黒神彰治　編集委員

羽島地区に残る戦中・戦後の羽島婦人会簿冊の活字変換を行いましたが、その中で「大日本婦人会」という組織を初めて知りました。戦時中、銃後を守る婦人の組織として、地域でさまざまな支援活動をしながら国防国家体制に協力していたことがわかりました。

時系列に見ていくと、サイパン島やグアム島の玉砕、台湾沖海戦、フィリピン島での特別攻撃隊などが挨拶文面に見られ、戦局が悪化していく様子がわかります。

国難に追い込まれ、それに立ち向かう勇ましい表現も見られますが、地域の青少年、さらに夫や子供まで戦地に招集され、内心は、悲壮と困窮と苦悩の連続だったことでしょう。

私事ですが、私の親世代は戦争の真っただ中の体験者です。それは 20 代、10 代後半の青春時代のことでした。

しかし、親から戦争の話は、あまり聞きませんでした。勝ち戦さは聞いたことがありますが、あまり思い出したくなかったのだろうと思います。話の終わりの口ぐせが「戦争は絶対にしてはいかん」でした。

史料収集する中で、二百三高地やミッドウェー海戦、ソロモン沖海戦などに、当市からも兵士として出征し、はるばる東南アジアや南太平洋まで行って戦い、亡くなっていることを実感しました。

今、ウクライナでロシアによる侵略戦争が続いています。悲惨な状況を伝えていますが、76 年間戦争を知らない日本では、それを実感することはできません。

しかし、この史料集は、主に私たち地域の一世代前の方々の実体験であるので、戦争の悲惨さを身近に感じることができると思います。

【参考・引用文献】

旭小学校 1980『旭小学校創立 100 周年記念誌』旭小学校創立 100 周年記念誌編集委員会編
旭小学校 2001『旭小学校創立 120 周年記念誌』旭小学校創立 120 周年記念誌編集委員会編
市来町 1975『町報いちき「終戦特集」第 56 号』
市来町郷土誌編集委員会 1982『市来町郷土誌』市来町役場
大阪毎日新聞　1942.7.18
岡田幹彦 2020「明治の英傑が遺した言葉」『致知 2020 年 2 月号』致知出版社
小野義文 2006『串木野市の石造物等』串木野郷土史研究会編
小原正夫他 1986『串木野市春日町沿革誌　潮入潟　春日町公民館』
河村透 跡部義雄 1894『征清譚林大義名分　上巻』磊磊堂
串木野市教育委員会 1984『串木野郷土史　増補改訂版』串木野市郷土史編集委員会編
竹下利男 1977『市来町湊地区 石塔編』石造遺物調査グループ
谷頭辰兄他 1895『日本帝国軍人名誉鑑下巻』盛文館等
出口保喜 2000『市来町迫郷土誌』出口保喜・江之口拓雄
所﨑平・奥田栄穂・瀬戸山淑子編 1995『くしきの 10 号』串木野郷土史研究会
所﨑平・安藤義明・石堂次美編 2014『くしきの 28 号』串木野郷土史研究会
長崎新聞　2019.8.9
橋之口博繁・橋之口篤実・節政純雄　発行年不詳『後世に伝えたい　わが郷土(いちき串木野)の戦争、空襲の記録』高齢者クラブ平江さわやか会
冨宿三善 1971『串木野漁業史』串木野漁業協同組合
文化いちき編集委員会 2016『文化いちき 24 号』いちき串木野市文化協会市来支部
文化いちき編集委員会 2017『文化いちき 25 号』いちき串木野市文化協会市来支部
増元八千代 1980「出征兵士の見送りと遺骨迎えに市来駅まで」『創立百周年記念誌　かわかみ』
本浦東部落会 1940『本浦東部落会　記録簿』
森田清美 1996『さつま山伏』春苑堂書店
森田清美編 1996『串木野まぐろ漁業史』串木野市船主組合
森田清美監修 1997「旭を体験して」『生きた地域文化の体験学習』串木野高等学校
森田清美監修 1998「生福・冠岳を体験して」『生きた地域文化の体験学習』串木野高等学校
著者・発行年不詳『串木野駅史』(※串木野駅に保存されていた史料を橋之口篤実氏が編集)

協力者・協力団体など(敬称略)

長崎原爆資料館　呉市海事歴史科学館
いちき串木野市立旭小学校　いちき串木野市立荒川小学校　いちき串木野市立川上小学校
いちき串木野市立市来小学校　鹿児島県立市来農芸高等学校

故今吉孝夫(さいたま市)　大迫大一郎(湊町)　小原俊幸(野元)
奥田順子(麓)　長洋孝(麓)　加治佐千代子（駅前）
肝付兼文(串木野神社宮司)　芹ケ野千紗子(島内)　冨永伸博(羽島)
中間啓行（中原）　中山重雄(崎野)　橋口あけみ(浜ヶ城)
橋之口篤實(平江)　故松崎孝(島内)

いちき串木野市郷土史料集４　「戦争の記憶編」

2023 年 3 月刊行

発行　いちき串木野市教育委員会
編集　いちき串木野市郷土史料編集委員会